

「忍耐と信仰をもって」

七里教会 2022年5月22日

テサロニケの信徒への手紙二 1：1－12

佐々木 佐余子

今朝からテサロニケの信徒への手紙の二通目を学びます。この第二の手紙は、パウロがコリントに伝道して、すぐ執筆された手紙です。発信人はここに書いてあるようにパウロ、シルワノ、テモテです。普通、日本人が相手に手紙を送る時、まず最初に時候の挨拶から始まります。今だったら、「草花萌え出る青葉の候となりました。お元気でお過ごしと拝察しております」と書くところでしょうが、パウロは違うのです。尤もイスラエルは日本のようにはっきりとした季節の移り変わりはないので、春が来たと思っても、いつの間にか厳しい夏になるのです。ですから、彼らはどんな場合にも使える「シャローム」と挨拶するのです。神の平安があるようにという祈りのこもった挨拶です。いいですね。そういう挨拶も、2節にあるように、「恵みと平和が、あなたがたにあるように」は、他の手紙にも多く見られます。それで今日、私たちキリスト者もパウロに倣って手紙の書きだしに「主を賛美します」と挨拶し、終わりにシャロームとして閉じる方もおられます。

あいさつに続いてパウロはテサロニケのクリスチャンたちに感謝の気持ちを表します。再三お話しするように、テサロニケの教会の人たちはローマ帝国からは迫害を受けていました。国から迫害されるということは、その町の人々からも総じて良くは思われていない、ということなのです。けれど、彼らはくじけず、神さまを信じ、イエスさまを救い主と信じて生活してきたのです。その様子を見てパウロはどんなにうれしかったことでしょう。パウロは多に感謝しました。3節に「兄弟たち、あなたがたのことをいつも神に感謝せずにはいられません。また、そうするのが当然です。あなたがたの信仰が大いに成長し、お互いに対する一人一人の愛が、あなたがたすべての間で豊かになっているからです」と語ります。信仰と希望と愛はクリスチャンの目指している徳目ですが、テサロニケの人たちがこの三つの点で成長していることはパウロにとって大きな喜びだったのです。パウロはテサロニケの人々が誇りでした。パウロがテサロニケで伝道した期間はわずか三週間足らずだったのです。使徒言行録を読むと、そのことが記されています。そこのところを少し読んでみます。「パウロとシラスがアンフィポリスとアポロニアを経てテサロニケに着き、パウロはいつものようにユダヤ人の集まる会堂で3回の安息日に渡って聖書を引用し論じ合った」とあります。その後、妬んだユダヤ人が暴動を起こしたのでベレヤに向かったことが記されています。その短い期間にもかかわらず、主の福音はしっかりテサロニケの人々に覚えられ、芽を伸ばしていたのでした。そればかりではなく、彼らは迫害というひどい苦しみの中で聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れパウロに倣う者として、また一層主に倣う者とされたのです。そして、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範になるに至ったのでした。少し後、パウロは「ローマの信徒への手紙」を執筆したのですが、その中でテサロニケの信徒たちを褒めているのです。「マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです」と言っている

ます。エルサレム教会がひどい飢饉で苦しんでいた時、テサロニケの人々も貧しいのに、献金をしてくれたことにパウロはとても喜んでいました。

イエスさまは種まきの譬話でこのように教えておられます。「石だらけのところに蒔かれた者とは、み言葉を聞いてすぐ喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらく続いても迫害や艱難が起こると、すぐにつまづいてしまう人」と語られました。しかし、テサロニケの人々は、神さまに従順に従い信仰を守ったのです。忍耐はただ空想することではなく、艱難に立ち向かった時に成長するのです。ハードルが高くても挫けないで飛ぶこと。身近な例でいうと、毎週礼拝を守ることは忍耐が必要です。やりたいことは山ほどあるけれど、今は後まわしにして礼拝を先に守ること。そういう積み重ねが必要です。そうすると次第に忍耐力が付いてくるのです。テサロニケの人々は困難な中でも妥協することなくユダヤ人の嫌がらせも起こったけれどパウロを守り、そのことによってますます信仰が強くなっていったのです。

主イエスを信じたら悩みも苦しみも病気もすべてなくなるわけではありません。主イエスは私たちの悩みや苦しみを負ってくださるけれど、しかし、どんな場合でも祈れば必ずその願い通りになるというものではないですね。もし、そうならキリスト者にとって苦しみなどないでしょうし、迫害で苦しむこともないのです。しかし、主イエスは言われています。「あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ福音書 16:33)

以前、あるご婦人が七里教会の礼拝に見えられました。その方は福音自由の教会の方でした。その頃 50 代位だったでしょうか。物静かな方でした。何でも勝利教会に行っておられるということでした。でも随分珍しい方だと思いました。その方は礼拝が終わると誰とも話すことなく静かに帰られました。2 年ぐらい続いたでしょうか。ある時ふっと見えなくなったのです。どうしたのかしらと置いていたら、受付の方がこう言われるのです。「どうも、あの方亡くなったらしい」。私は思いました。きっとその方が何かのご病気を患っていて、ご自宅に近いこの教会に出られたのではないだろうか。今でもお顔を思い出します。受付で少しお話しただけでしたが、その方は死の間際まで礼拝を守り通されたのだと思います。人によっては自暴自棄になり、神も仏もないという心境になる人もいるのではないのでしょうか。でも、たとえ、病気は癒されなくても、その方の心はイエスさまに支配されており、霊の慰めが、癒しが、勇気が、平安が、与えられていたのではないかと思います。

次に 8 節に行きます。「主イエスは、燃え盛る火の中を来られます。そして神を認めない者や、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者に、罰をお与えになります。」9 節「彼らは、主の面前から退けられ、その栄光に輝く力から切り離されて、永遠の破滅という刑罰を受けるでしょう」と言っています。パウロはどういう人たちを念頭に置いているのでしょうか。今までを顧みて思うにパウロの行った伝道に嫉妬心を起こし暴動を起こした人々、ユダヤ人、そして、商売の迷惑とばかりにパウロを妨害した異邦人たちを念頭に置いているかもしれません。そのような人々は神から刑罰を与えられると言っているのです。思い出すと、

主が十字架に掛けられた時、2人の強盗も十字架に掛けられていました。1人は自分の罪を認め、悔い改めて主イエスを信じただけで、もう1人は最後まで主イエスを信じないばかりか、かえって罵倒して死んでいきました。ルカによる福音書を読むとこうあります。「十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。『お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。』すると、もう一人の方がたしなめた。『お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことはしていない。』」この時、後の人は主イエスと一緒に楽園にいたと言われました。この強盗は人生の最後でイエスさまから楽園・パラダイスに入れられました。同じように悪いことをしたのに一方は地獄に、一方は楽園に入れられました。十字架上の主イエスは、そのような権限を神から与えられていたのです。これは人間の言う言葉ではありません。主イエスは死の間際で神の子として顕現されました。

イギリスの話ですが、亡くなった人は教会の庭に埋められるのです。ですから庭に十字架があちこち立っています。日曜日に礼拝に出かけると、教会の人達は眠っているおじいさんやおばあさんに会えるでしょう。道路から教会の玄関に通じる石畳が通っていて、左右に十字架が立っているのです。その十字架には亡くなった方の氏名と生年月日と何年に亡くなったか石碑に刻まれているのです。朝、そこを通ると祖先に挨拶し、帰る時は「さよなら、またね」というのかもしれませんが。向こうは土葬ですから、亡くなったらそのまま御棺に入れられて埋められるのです。でも何年もたつとお骨になり、その後土に帰ります。

私が思うにキリスト教はすごい宗教だと思います。と言っても他の宗教のことはあまり知らないのですが、他の宗教はまた違った真理を持っていると思いますが、ただ言えることは、あれだけの迫害がありながら約400年もの間、耐えて信仰を持ち続け、最後は国家宗教として認められたということは、真の宗教と言えるのではないのでしょうか。パウロは誇りに思っているのです。ありとあらゆる迫害と苦難の中で、忍耐と信仰を示していることを。このテサロニケの教会のクリスチャンたちを模範として代々、世々の教会は忍耐と信仰を受け継ぎ4世紀もの長い間絶えることなく続けられてきたのではないのでしょうか。勿論、全部のクリスチャンたちがそうであったのではないでしょう。中には脱落して落ちた人もいます。信仰の強い人もいれば弱い人もいます。棄教する人もいたでしょう。でもキリスト教が絶えることなく続けられたのは神さまのお力です。聖霊の力によって教会は歩みを続けられるのです。

パウロが東に行くか西に行くか、迷っていた時、東に行こうとした時、イエスの霊がそれを許さず、そこに踏みとどまった時、パウロは幻の中で一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と言ったというのです。それで、パウロたちはすぐマケドニアへ向けて出発したのでした。そのところは、先週木曜日の聖書研究・祈祷会でお話ししたところですが、マケドニアからヨーロッパ伝道が始まるのです。ですから本当に聖霊行伝ですね。

七里教会も忍耐と信仰の連続ではなかったでしょうか。それはどこの教会・伝道所も同じです。楽な教会はどこにもありません。私たちがこの教会に召され、集められたのは、主のお召であると考えます。力の限り与えられた教会のために尽くしていきたいと思います。